

大会長講演「放射線看護の継承と創造」 Succession and innovation of radiological nursing

吉田 浩二

Koji YOSHIDA

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 保健学専攻

Department of Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

第12回学術集会は、「放射線看護の継承と創造～放射線看護専門看護師と描く未来～」をテーマとして、2023年9月9日(土)、10日(日)の2日間で長崎大学坂本キャンパスにて開催された。これまでの諸先輩方が築いてきた放射線看護学の継承と、さらには誕生したばかりの放射線看護専門看護師と創造していく放射線看護学の未来をイメージして、さまざまな取り組みを企画した。参加者は175名で、一般演題は24演題、交流集会は5演題であった。会場にお越しいただきました皆さま、また学術集会の運営にご支援とご協力いただいた皆さまに、深く感謝申し上げたい。

以下、初日に実施した会長講演の内容の一部を紹介する。

1. 放射線は「善」か「悪」か？

私は被爆地長崎で生まれ育ったことから、小学生になると原爆の話聞く機会が増え、その時は科学的なことは当然わからなかったが、当時の写真や被爆者の講話などで戦争や原子爆弾の恐ろしさを感じたことを覚えている。その時から始まった私と放射線の歴史、否、既に被爆地長崎で生まれた私にとって、そして被爆者である祖父を持つ私にとっては、生まれた時から放射線の歴史に携わるのは必然だったのかもしれない。幼い時から原爆の悲惨さを学び、「放射線を浴びるとがんになる」のように「放射線=悪」と認識していた私にとっては、病院で行われている「放射線を当ててがんを治す」という「放射線=治療(善)」が不思議でならなかった。

2. 放射線の探究

放射線は「善」か「悪」か、私の結論も出ないなかで、医療領域においては、放射線診療が目覚ましい発展を遂げている。私は、その結論を導くために、長崎大学大学院修士課程に新設された放射線看護専門看護師養成コースに進学した。進学後に聴講した原爆やチェルノブイリ原発事故と長崎大学の歴史、特に自ら被ばくしながらも医療活動を行った長崎大学病院の医療者、原発事故後の被ばく影響や住民の不安払しょくのために現地入りした医療者の行動力や使命感に心を打たれるものがあった。そして、その後の放射線被ばく影響を追求するために調査が長きにわたって実施されていることや、その調査結果が現在の被ばく医療の基盤となっていることなど、歴史が継承され、そこから新たなものが創造されていく循環を知ることとなった。そして、そ

のような歴史をこれからは後世に繋いでいくという状況のなかで、2011年3月に東日本大震災、それに伴う福島第一原子力発電所事故が起こってしまった。

3. 私と福島第一原子力発電所事故

私は修士課程の学生として、長崎大学の職員として、原子力災害の歴史的事象と向き合うこととなった。その最中で、私は傷病者の搬送のために、爆発後の原子力発電所にヘリコプターで向かった。搬送には広島大学の医師と向かったのだが、被爆地である長崎と広島医療者が引き寄せ合ったのは科学とは無縁の不思議な力を感じた。その後、医療支援ではさまざまな活動（体験）をすることとなった。放射能汚染が広がった緊急事態のなかで、住民は放射線の不安を抱え、医療従事者は放射線の知識の有無にかかわらず対応を余儀なくされた。私は大学院で得た知識や技術を駆使し、医療者や住民への対応を行った。そのなかで「活動中の個人線量計と空間線量率との関係性」¹⁾や「緊急被ばく医療活動の経験からの課題」²⁾を発信してきたことは放射線の専門家としての役割を担えたと自負するところではあるが、事故から13年が経過してもなお、課題が解決されていないことは、私自身の力不足なところを感じるようになった。

4. 放射線看護の対象と看護の目的

対象は、「放射性物質」でもなければ、「放射線」でもない。さらには「被ばく」でもない。どうしても「放射線」や「被ばく」に目が向きがちであるが、看護の対象は「人」とあるということを忘れてはならない。つまりは、放射線看護の対象は「被ばくを受ける（受けた）人」となる。日本看護協会は、2015年に「いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護」を看護の将来ビジョンとして、声明を出した³⁾。われわれ看護職には、放射線診断／治療を受ける対象や原子力災害に遭遇した対象のQuality of Lifeを守り支える看護を実施することが求められる。そのためには、対象が求めるLIFE（いのち・暮らし・尊厳）を探り、看護が得意とする対象理解を深める努力を引き続き行っていく必要がある。

5. テーマに込めた思い

学術集会のテーマは「放射線看護の継承と創造～放射線看護専門看護師と描く未来～」と決めた。このテーマには、経験豊富な看護師、すなわち専門看護師が、これまでの先輩方が繋いできた知見や思いを後続の世代に伝え、看護のスキルと品質を保つことで、放射線看護の分野全体が発展し続け、患者ケアにおける安全性と効果性を確保し、さらには対象の多様化や放射線利用の社会的な変化に適応した新しいサービスを未来のために築くことへの思いを込めた。私自身、放射線は「善」か「悪」か、未だ結論が出ないでいるが、その探究もしつつ、これまでの先輩方の思いを継承し、非核平和を宣言する被爆地長崎から放射線看護の創造に貢献していきたい。

引用文献

- 1) Yoshida K, Hashiguchi K, Taira Y, et al. Importance of personal dose equivalent evaluation in Fukushima in overcoming social panic. *Radiation Protection Dosimetry*. 2012, 151(1). 144-146.
- 2) 吉田浩二, 中島香菜美, 廣島陽子, 他. 東京電力福島第1原子力発電所事故による放射線汚染等に対する緊急被ばく医療—放射線看護の専門看護師を目指した取り組みと課題—. *日本放射線看護学会誌*. 2013, 1(1). 37-42.
- 3) 公益社団法人日本看護協会. 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン. <https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/> (検索日: 2024年2月22日).